

一つの伝記論 (4)

安 達 肆 郎

目 次

序

一

二

三 利用された伝記

四 好事家の伝記

五 文学的伝記

六 歴史的伝記

七

八 自己目的・自足的伝記(1)……本号

八 自己目的・自足的伝記(1)

前章の終に、それまでにした「伝記」の分類、検討の結果をふまえて、われわれが、これからなすべき探究の方向と果たすべき課題を示したが、以下、その指示に従って探究をすすめる。

「指示」によると、差し当ってわれわれの課題は、「自己目的・自足的伝記」といえる様な伝記の実例をみつけ出すことである。(前述)

さて、それをみつけ出すために、ここでは、一つの試みとして、次の手続きをとることにする。即ち、先ず(1)、「自己目的・自足的伝記」がもつであろう外見上の大まかな特徴、——なかでも、その様な伝記を探す際に目印となる様な特徴を予め考え、これによって、「自己目的・自足的伝記」といえるような実例の所在及び実例についておおよその見当をつける。(2)、見当をつけた実例について、果たしてそれが、実際に、しかも、みせかけだけでなく実質的に「自己目的・自足的」であるか否かを検討し、確認する。

(1) 「伝記」というものが、頌徳文や悲劇、喜劇、叙事詩、抒情詩等の文学作品、歴史記述等から独立して始めて世に現われた頃、または、それにちかい頃に書かれた伝記であること一。というのは、「自己目的・自足的伝記」といえる様な伝記の筆者においては、「伝記を書く」という彼の希いが、他の目的、関心等のすべてに優先するはずであるが、その頃、他種の作品や叙述から独立して始めて「伝記」を書いた筆者の場合、何よりも先ず「伝記を書く」という希いが優先し、他の希いや目的はそれによってのり越えられているはずだからである。⁽¹⁾

(2) 人々（読者）に深い感銘を与えた伝記であること一。というのは、「自己目的・自足的伝記」は、直接に（他の「目的」、「狙い」等を介さずに）ただ主人公そのひとを人々に伝えるために書かれるし、また、それは、主人公の一側面でなく、主人公そのひと（全人）を人々に伝える伝記となるはずだから（後述参照）、それだけこれを読む人々に深い感銘を与えらると思われるからである。

さて、西洋古典の専門家によると、ギリシアでは、古くから個人の誕生、素性、性格（諸徳）、事績、死などについて語られ述べられたが、その場合大抵は、個人の生涯の全体でなく一部分について断片的に語られ述べられるに過ぎなかった。また、それらは、みな叙事詩、抒情詩、悲劇、喜劇、歴史叙述等の一部として述べられたのである。⁽²⁾

個人の生涯の全体についての、しかもそれだけで完結し且つ他種の作品や叙述から独立した文章が現われるのは、紀元前4世紀になってからだという。⁽³⁾⁽⁴⁾

さて、当時この様な文章（「伝記」）を書いた人々の中、「伝記」の新しい叙述形式の実験家、開拓者、創始者といわれているのは、クセノフォン（Xenophon B.C. 430～354）とイソクラテス（Isocrates B.C. 436～338）とである。つまり、クセノフォンとイソクラテスは、当時はじめて完結独立した「伝記」を書いた人々の代表なのである。⁽⁵⁾

そこで、前述した第一の「目印」によると、この両者が書いた伝記の中に「自己目的・自足的伝記」の実例が含まれているはずである。

ところが、この中イソクラテスが書いた『エウアゴラス』伝について、われわれは先に（小論第三章）それが、なお所謂「頌徳文」の趣の強い且つ主人公の一族に対して教訓を示すという、「伝記を書くこと」そのこと以外の目的を公然とうたった伝記（「利用された伝記」）であって、「自己目的・自足的伝記」とはいえぬことを確認した。

そこで、私はもう一人のクセノフォンが書いた『アゲシラオス (Agesilaus)』伝をとりあげ、その検討を、本学で刊行された『総合科学の諸問題』（『故金沢尚淑博士追悼論文集』1987）所収の拙稿「伝記者のこころ」第二章で試みた。その結果、『アゲシラオス』伝は、「自己目的・自足的伝記」の一つの実例であることが確認されたが、小論では、重複を避けるため、右の「第二章」の摘要を示すことを省略し、別の機会に検討したもう一つ別の事例について、その「検討」の経過及び結果の摘要を示すことにする。⁽⁶⁾

もう一つの実例が、第二の目印によって見出される。

周知の様に、ロマン・ロラン (Romain Rolland) は、1903年から1911年にかけて『卓越せる人々の生涯 (Vie des hommes illustres)』という三部作を書いた。それから16年後 (1927年)、ロランは、三部作中の一つ『ベートーヴェンの生涯 (Vie de Beethoven)』に後から付した一つの序文で次の様にいう。

「当時の世界がこの『ベートーヴェン』をつかんだ」⁽⁷⁾「この本が世に出た当時には、フランスの数百万の人々からなる一世代——自己の理想精神が抑圧されているのを感じている一世代が存在していて、この人々は、彼等の精神に解放の力が来るのを心待ちに待っていた。そういう解放の言葉を……彼等はこの本にも求めに來たのである。」⁽⁸⁾そして、彼等の魂はこの本によって救われた。だから、「私のこの小さな『ベートーヴェンの生涯』の中には、消え失せた彼等の魂のおもかげが宿っている」と。つまり、この伝記は当時の人々（読者）に深い感銘を与え、当時の社会で重要な存在理由をもっていた、というのである。

私は、ロランのこれらの言葉を信用しよう。そして、先述した第二の目印によって、ロランの『ベートーヴェンの生涯』を「自己目的・自足的伝記」の一つの実例である、と仮定しよう。⁽⁹⁾⁽¹⁰⁾

しかし、ロランの『ベートーヴェンの生涯』は、果して実際に（しかも、みせかけだけでなく実質的に）「自己目的・自足的伝記」であるかどうか。次にそれを考察し、確かめねばならぬ。

さて、この「考察」の要諦は、『ベートーヴェンの生涯』を書いた際の筆者ロランの「主たる希い」の元の姿とそれの真相を究明することである。というのは、筆者の「主たる希い」は、もとは筆者がこの伝記を書く原動力となったものから生まれ出た（その中に含まれていた）はずで、従ってその元の姿はこの伝記の実質的な基本的性格を十分に体现し且つ端的にそれを示しているはずだからである。⁽¹¹⁾

さて、筆者ロランの「主たる希い」は、『ベートーヴェンの生涯』に付けられた二つの序文にあげられているが、これを手掛りにこの伝記の実質的な基本的性格を究明するというわれわれの観点からすると、二つの「序文」及びそこにあげられた「主たる希い」には、いろいろ問題があつて単純ではない。それで以下、先ずそれらの「問題」を順次に解明し、その結果をふまえて、「主たる希い」の元の姿を究明することにする。

さて『ベートーヴェンの生涯』には書かれた年が異なる二つの序文が付けられている。しかも、後年（1927年）に書かれた序文（以下、これを第二序文と呼ぶ）が、この伝記発刊の年（1903年）に書かれた序文（以下、これを第一序文と呼ぶ）に先立って付けられている。

さて、第一序文があげる筆者の「主たる希い」は、当時のフランスの困難な社会情勢の下で、救いと友を呼んでいる悩める人々に、「不幸を通じて偉大であった」人の実例（ベートーヴェン）を与え、その人の勇気が悩める人々を支える力となる様にする⁽¹²⁾ことである。（ここでは、後になって第二序文であげる主たる希いには全然触れていない。）

他方第二序文があげる「主たる希い」は、筆者ロラン自身の魂の救済者（ベートーヴェン）に感謝を捧げることである。だから『ベートーヴェンの生涯』は、そこでは、ベートーヴェンに捧げられた「感謝の歌（Dankgesang）」だと

されている。⁽¹³⁾（ここでは、第一序文にあげた希いは、表面にはみられない。しかし消極的なかたちで示されている。即ち、『ベートーヴェンの生涯』は、当時のフランスの苦悩する人々の精神を解放し、筆者がそのことを特に希って書いたわけではないのに、＜少しも予期しなかったのに＞彼等の生涯の伴侶となった、と。）

明らかな様に、第一序文にあげた希いと第二序文にあげた希いとは相違する。また、第一序文で強調された希いが、第二序文では、筆者の「予期しなかった」こと、「特に希った」わけではないこととされている。ここには一種のくいちがいが見られる。同一の伝記に付された同じ筆者の二つの序文にあげられた「主たる希い」が、この様に「相違」したり「くいちがった」りするの奇妙なことである。

しかし、「相違」や「くいちがい」は実は、みせかけで、それはロランの本心からでなく、何等か他の原因によっておきたのかも知れない。そう疑うに足る理由、事情がある。それ故、ロランの「主たる希い」の元の姿とその真相を明らかにするには、先ず、その「事情」を考察して、「みせかけ」を除去せねばならぬ。⁽¹⁵⁾

3

先ず、二つの序文が24年の歳月を隔てて書かれていることを注意し、各序文が、それぞれロランをとりまく如何なる社会情勢の下で書かれたかをみることにしよう。そして、各序文にあげられた希いがロランの本心からのものか否か一、本当の希いはいかを考察しよう。

先ず第一序文が書かれた頃の情勢であるが、1903年1月『ベートーヴェンの生涯』は、まず『パリ誌』に発表された後、ロランの友人ペギーが刊行していた「半月手帳」に発表された。それから7年後、ペギーは当時を次の様に回想している。

「……ロマン・ロランの『ベートーヴェン』が出たばかりだった。載せた『手帳』がどんなに突然の啓示だったか。それが端から端まで、どんな感動をひきおこしたか。それがどんなに突然、波の様に、底流の様に、いわば一瞬間に拡がったか……われわれの購読者達は、今だにそれを思いおこすのである。」⁽¹⁶⁾

『ベートーヴェンの生涯』がこの様に人々の「感動をひきおこし、一瞬のうちに拡がった」のは、一つには、当時の社会情勢の所為である。ロランは第一序文の中でそれに触れている。「空気は我等の周りに重い。旧い西欧は、毒された重苦しい雰囲気の中で麻痺する。偉大さのない物質主義が人々の考えにのしかかり、諸政府と諸個人との行為を束縛する。世界が、その分別臭くてさもしい利己主義に浸って窒息して死にかかっている。世界の息が⁽¹⁷⁾つまる」「生活は厳しい。魂の凡庸さに自己を委ねない人々にとっては、生活は日ごとの苦闘である。」⁽¹⁸⁾「貧と、⁽¹⁹⁾厳しい家事の心配と、精力がいたずらに費える」「そして、最も強い人々といえども、その苦悩の下に挫折する様な瞬間があるのである。彼等は一つの救いを一人の友を⁽²⁰⁾呼んでいる。」

この様な社会情勢をかえりみると、ロランが第一序文で、特に、不幸な悩める人々に救いと彼等を支える友を与えることを強調し、あたかもそれが『ベートーヴェンの生涯』を書いた主たる希いであるかの様にいうのも無理からぬことと思える。

しかし、もし『ベートーヴェンの生涯』が、本来主としてその様な希いのために書かれたのだとすると、この「伝記」は、ちょうど同じこの時期に同時に書かれたロランの作品（「信仰の作品」）『ジャン・クリストフ』と選ぶところがない。ロランの告白によると、『ジャン・クリストフ』こそは、「フランスにおける精神的なまた社会的な崩壊期に、灰の下に眠っている魂の火を目ざめさせる」ために、また「空気と日光を独占している『広場の市』に少数の不撓不屈の魂を対立させ」、それらの不撓不屈の人々に、「彼等の指導者」彼等の支えとなるべき一人の英雄を与えるためにロランが書いた作品⁽²¹⁾だったのである。

注意すべきは、ロランが、『ジャン・クリストフ』の様な作品（ロランは、それを「文学作品」と区別して「信仰の作品」と呼ぶ⁽²²⁾）と『ベートーヴェンの生涯』とを意識して区別していることである。ロランによると、ジャン・クリストフは、人々に与えるためにロランが「創造した」⁽²³⁾「ベートーヴェン型の英雄⁽²⁴⁾」であって、「クリストフはベートーヴェンではない。」⁽²⁵⁾

人々に与えるために自分が創造したクリストフと実在したベートーヴェンとをこの様に区別しているからには、ロランが、クリストフの生涯を描いた自分

の「作品」と、ベートーヴェンの生涯を記した「伝記」とを意識して区別していたことは疑いない。

とすると、『ベートーヴェンの生涯』という伝記を書いたロランの希いは、『ジャン・クリストフ』という「信仰の作品」を書いたロランの希い（前述）とは同じでなかったはず。少なくとも同種の希いではなかったはず。『ベートーヴェンの生涯』と『ジャン・クリストフ』とは並行して書かれた時期もあったというから、相互に影響しあったかも知れぬが、⁽²⁶⁾基本的に同種の希いによって書かれたとは思われぬ。

とすると、ロランが第一序文で『ベートーヴェンの生涯』を書いた「主たる希い」を前述の様に述べたのは、ロランの本心ではなくて、もともと社会主義的関心が強かったロランが、⁽²⁷⁾前述の様な社会情勢にひきずられた結果だと思われる。

では、『ベートーヴェンの生涯』を書いたロランの本来の（元の）希いは如何なる希いであったのか。しかしいま、それを「序文」（第一序文）から直接には知ることができないので、ここでは一つの仮説として、次の様に考えておくことにする。

『ベートーヴェンの生涯』を書いた当時、ロランは、自分が深く感銘し傾倒しているベートーヴェンそのひとを、他の人々にも伝えたい（伝えねばならぬ）と希っていた。これは本来、彼のベートーヴェンそのひとへの傾倒から直接生れた希いであって（後述）、「苦悩する人々に救いと友を与える」という目的とは関係がない。しかし、この様な「希い」は、右述の様な「目的」と結合しやすい。殊に、ロランの社会主義的関心と当時の前述の様な社会情勢の下では結合しやすい。第一序文にあげたロランの先述した希いは、この「結合」の結果であろう。

右述した仮説は、われわれを更に次の様な推量に導く。即ち、右の様に、ロランの本当の希い（その一つ）が、他の「目的」と結合して変貌し、それが偏って強調されたために、本来は、右の「本当の希い」と不可分に結合していた

もう一つの本当の希い（後述参照）が忘れ去られるに至る。こうして、第一序文では結局、「不幸な悩める人々に救いと友を与える」という変貌した一つの希いだけがあげられることになるのだ、と。

4

次に第二序文は、どのような社会情勢の下で書かれたのか一。

パリ・コミューヌの壊滅がフランス国民の民族意識に与えた深刻な影響も、また、それに根ざす1900年当時の先述の様な社会情勢も治まり、また、第一次世界大戦の影響も沈静した1927年2月28日、ウィーンで「ベートーヴェン（没後）百年祭」が行われ、ロランはそこで「ベートーヴェンへの感謝」の言葉を朗読している。第二序文は、その同じ年の3月に書かれている。とすると、『ベートーヴェンの生涯』が書かれてから既に24年が経過している。この「時の経過」と右述の様な社会情勢の変化によって、筆者ロランの心情は、『ベートーヴェンの生涯』刊行当時とは大きく変容する。刊行当時の苦悩する人々に対する彼の強い社会主義的関心は沈静し、他方、ベートーヴェンそのひとに対する刊行当時の切実な、生々しい感銘は風化する。

また、この頃（1927年当時）には、『ベートーヴェンの生涯』の性格に関連して、世間に様々の解釈、むしろ誤解、また、その見地からのこの伝記に対する批判、中には、ロランの希いを無視した見当外れの批判もあった様である⁽²⁸⁾。

この様な状況の下で、ロランは何故、新たに『ベートーヴェンの生涯』の序文（「第二序文」）を書くのであろうか一。恐らく、その直接の原因は、『ベートーヴェンの生涯』の性格に関する人々の右述の様な誤解であろう。しかし主な原因は、（右述の原因と密接に関係するが）、前述の様に沈静した社会情勢の下で「第一序文」をふり返ったロランが、そこにこの伝記を書いた自分の本来の希いが、最も大切な希いが述べられていないことを実感したことではないか一。（『ベートーヴェンの生涯』は、人々のためというより、「自分自身の魂が悩んでいた」こと、「ある経験によって、自分がその苦悩から救われた」ことから生れたのだ。その「経験」が、抑々自分が『ベートーヴェンの生涯』を書いた原動力だったのだ。第一序文には、その肝心の原動力となった経験のことが、また、そこから生れた自分の最も大切な希いが述べられていないではないか一、と。）⁽²⁹⁾

右の様な反省に基づいて、ロランは第二序文では先ず（冒頭に）この伝記を書く「原動力」となった自分の「ベートーヴェン体験」（後述）に関して述べ、また、自分が『ベートーヴェンの生涯』を書いた希いは、自分の「魂の救済者」ベートーヴェンに「感謝の歌」を捧げることだ、という。

第二序文執筆当時のロランの心情（反省）を前述の様に解してよければ、ここに述べた彼の「希い」は、ロランが『ベートーヴェンの生涯』を書いた大切な希い、即ちもう一つの「主たる希い」に違いない。しかし、そうはいつでも、右の「希い」は、元のままではなくて、前述した当時の社会情勢の変化や24年の歳月によるロラン自身の心情の風化の影響をうけて変貌してはいないはずがないのである。

しかし、ロランには他方、前述の様な反省があるから、その「変貌した希い」の隙間からいわば彼の本音が洩れ出ることとなる。

果たせるかな、ロランは同じこの第二序文の中で、この『ベートーヴェンの生涯』は、ベートーヴェンの音楽や事跡（歴史）について書かれたものではなくて、「私のこの『ベートーヴェン』は、……（ベートーヴェンに対する）信仰と愛との証⁽³⁰⁾であった」という。つまり、これを書いた私の本当の希いは、ベートーヴェンの音楽や事跡を述べるのではなくて、ただベートーヴェンに対する信仰と愛とを証しすることだというのである。

ロランのいう「信仰と愛とを証しする」とは、ベートーヴェンそのひとに対する自分の全人をあげての傾倒を自分自身に確認し、ひいて他者にもその証を示すこと（後述）で、前述した「感謝の歌を捧げる」という、主人公から距離をおいた、よそよそしい、いわば傍観者の姿勢、心情による希いとは異質であるが、どちらがロランの本当の希いなのか。ここでは性急な断定を慎み、一つの仮説として次の様に考えておこう。

ロランは、『ベートーヴェンの生涯』を書いた頃、ベートーヴェンそのひとに深く傾倒していた。当時、彼はその「傾倒」を証しすることを希った。しかし、以来24年の歳月が経過し、ベートーヴェンに対するロランの切実な心情は

風化した。かくて「信仰と愛を証しする」という本来の切実な希いが、ただ「感謝の歌を捧げる」という傍観者的なよそよそしい希いに変貌したのである、と。

さて、ここでも右の「仮説」がわれわれを次の様な推量に導く。即ち、ロランの希いが、「信仰と愛を証しする」から「感謝の歌を捧げる」へ変貌し、それが偏って強調されたために、本来は、「信仰と愛を証しする」という希いと不可分に結合していた「自分が傾倒するベートーヴェンそのひとを他の人々にも伝えたい（伝えねばならぬ）」というもう一つの本来の希いが忘れ去られる。そこで第二序文では、ロランは「ベートーヴェンそのひとを他の人々に伝える」ことには、積極的な関心を示さない（先述）。結局、第二序文では、ベートーヴェンに「感謝の歌を捧げる」という変貌した一つの希いだけが強調されることになるのであろう。

以上、第一、第二序文の希いを、それぞれが書かれた時期の社会情勢及びロラン自身の当時の心情の内へ戻して考察したが、その結果に基づいて次の様に推量することができる。即ち、先述した二つの序文にあげられた希いの「相違」や「くいちがい」は、実は、見せかけで、ロランの本来の希いの一方が、ロランをめぐる諸種の状況のために変貌し且つ偏って強調され、その結果、他方の希いが忘れ去られたために生起したのである、と。結局、われわれの推量では、第一序文を書いた時も、第二序文を書いた時も、ロランの心底にあったのは、常に同じ二つの希いであったのである。また、その二つの希いは、元は（本来は）「序文」があげているのとは違ったものであったはずである。

5

以上、ロランが二つの「序文」にあげた「主たる希い」の「相違」や「くいちがい」を問題にして、その原因を追究した結果、ロランの「主たる希い」は、元は（本来は）「序文」にあげた希いとは違ったものであったであろうこと、また、「主たる希い」は、元は、（本来は）ただ一つでなく二つであったであろうことが判明し（推量され）た。（われわれは先に、その二つの希いが元は＜本来は＞、如何なる希いであったか、についても仮説を示した。）

これは一つの成果である。問題はしかし、その元の（本来の）希いが実際に如何なる希いであったか（それについての、前述したわれわれの仮説が真実であるか否か）、また、元の（本来の）希いが、実際に、二つの希いであるか否か（そのことについての、われわれの先の「推量」が真実であるか否か）である。ロランが『ベートーヴェンの生涯』を書いた「主たる希い」の元の（本来の）姿とその真相を究明する探究の第二段階として、次にその「問題」を考察しよう。

さて、まず、ロランが『ベートーヴェンの生涯』を書いた主たる希いが、実際に、元は（本来は）如何なる希いであったかを確かめるには、ロランが第一、第二序文にあげている「変貌した希い」を、ロランが『ベートーヴェンの生涯』を書く原動力となった彼の一つの経験との関わりの中へ戻さねばならぬ。いわばその光の下で見直さねばならぬ。

というのは、ロラン自身も認めるように、⁽³¹⁾「主たる希い」は、元は（本来は）、原動力となったロランのその「経験」に含まれていて、そこから直接出てきたに違いないからである。

ロランは第二序文の冒頭、『ベートーヴェンの生涯』を書く原動力となったのは、1901年、彼が内外とも困難な状況にあった時になされた彼の「ベートーヴェン体験」（後述）だという。ロランの告白によれば、『ベートーヴェンの生涯』は、「ベートーヴェン体験」によって呼吸を取り戻した魂が再び身を起してベートーヴェンに捧げた感謝の歌である（先述）。してみると、『ベートーヴェンの生涯』は、ただ「ベートーヴェン体験」に基づいて、直接（他の「目的」「狙い」等に媒介されることなく）そこから生れたのである。「ベートーヴェン体験」という、主人公についての経験と『ベートーヴェンの生涯』とは、ロランの経験では、直接に結ばれていて、その間に筆者の勝手な他の「目的」「狙い」等が入り込む（介在する）余地はない。とすると、「ベートーヴェン体験」と『ベートーヴェンの生涯』とをつなぐロランの「元の主たる希い」は、後から、また、外から「ベートーヴェン体験」と『ベートーヴェンの生涯』との間へ入り込んだものではなくて、いわば「ベートーヴェン体験」のうちにとも

と含まれていたと解する他はない。

そこで、変貌した二つの希いを、いわば、その母胎である「ベートーヴェン体験」とのかかわりの中へ戻し、その光の下で見直せば、それによって、二つの希いはその元の（本来の）姿をとり戻すに違いない。また、元の（本来の）希いが二つであったか否かも、それによって同時に確かめられよう。

しかし、一体ロランの「ベートーヴェン体験」は如何なる体験であったのか、まずそれを明らかにせねばならぬ。

さて、ロランは自分の「ベートーヴェン体験」に関して、第二序文の冒頭かなり詳しく述べた後、「私自身のことをくぐくぐ述べて」⁽³²⁾と読者にあやまっている。ロランは、「ベートーヴェン体験」を（読者に）いわずもがなのことと思っているのであろうか。この様な「ベートーヴェン体験」の軽視は、25年の歳月の経過によって、ロランの心中、「ベートーヴェン体験」自体が風化したことを示すものであろう。25年前（1901年）はじめてそれがなされた当時、「ベートーヴェン体験」は、ロランにとって、もっと痛切な体験であったに違いない。それ故、われわれは、第二序文に述べられた「ベートーヴェン体験」及び、特に、その経験がなされた頃のロラン自身の内外の状況に関するロランの簡潔な叙述を、他の資料によって補い、できる限り、それを風化以前の姿に戻す様にしなければならない。

第二序文の冒頭ロランは、「ベートーヴェン体験」がなされた頃の自分の内外の状況を、簡潔に次の様に述べる。「すでに今から25年ほど前、私がこの小さな『ベートーヴェンの生涯』を書いたあの頃、私は、音楽学的な著作をしようとしたのではなかった。それは1902年であった。私は破壊し更新する幾多の嵐に富む紆余曲折の一時期をくぐり抜けつつあった」と。⁽³³⁾

ロランの生涯の中「破壊し更新する幾多の嵐に富む紆余曲折の一時期」とは、具体的には、どの様な時期であったのか。

1901年3月、それまで8年3ヶ月にわたって生活を共にしてきたクロチルドと離婚。原因について、ロランはただ「私達二人の生活は、どちらも相手のた

めに自分を犠牲にすることを欲せず、二人とも反対の目標に向っているの⁽³⁴⁾で
「一。」というばかりだが、とにかく、この離婚はロランには大きな痛手であっ
た。友人宛の当時の手紙でロランは次の様にいう。「離別は完了しました。私
は今、この上なく苛酷な日々を過しています。私は痛手の治癒をその鋭き自体
から期待しています。」⁽³⁵⁾しかし、痛手は容易には癒えなかった。同じ友人宛の
後々の手紙からもそれがうかがえる。⁽³⁶⁾ずっと後年の日記でもロランは、クロチ
ルドとはじめて逢った日を回想している。⁽³⁷⁾

離婚後、ロランは一時両親と同居したが、間もなく両親とも別れて、カタコ
ンベを見下ろすモンパルナスの小さな家へ転居、わびしい独り住まいを始め
る。後年（1931年）ロランは、この家のこと、その頃の自分の生活のことを、
次の様に回顧している。「この家は、一方では、重い車の通行や大都会の絶え
間ないどよめきで揺り動かされていたが、反対側は、修道院の古い庭の、陽の
照り渡った静寂にひたされていて、その庭には二百年もの齢をもった老木が幾
本もあり、……当時の私の生活は孤独で、不如意で、友達もなく、喜びは自分
で作り出す喜びの他はなく、教師の勤め、論文執筆、歴史の研究など、おしつ
ぶされるほどの仕事を背負いこんでいた」と。⁽³⁸⁾

やや前後するが、この頃（1902年）、数年来書きつけて来た戯曲が上演され
た（3月21日、戯曲「7月14日」上演、戯曲「時は来らん」発表）が何れも成
功を収めなかった。今後上演される見込みはなく、彼自身そのために工作する
気力を失っていた。それに、彼が推進してきた「民衆演劇運動」も挫折した。
またこの頃（1902年）、ローマ留学（1889～91年）以来の心の友、マルヴィーダ
・フォン・マイゼンブークとローマで最後の別れをしている。

他方、ロランが強く関心しているフランスの社会情勢は、普仏戦争での敗北
（1870年）、パリ・コミューンの壊滅（1871年）にひきつづいて、ブーランジ
ュ將軍事件（1889年）、ドレフュス事件（1897年）などがおこり不穏であった。
ロランはこの頃のフランスの状況を、「社会の頹廃と政治の墮落」「文明の崩
壊」と呼び、戯曲の中で、それに対する絶望と危機感を示している。⁽³⁹⁾また、当
時のフランスその他西欧の文学、音楽等の芸術すべてに対して、厳しい批判と
軽侮、敵意をさえ示している。⁽⁴⁰⁾

結局、ロランの生活は、当時、内外とも行き詰っていたのである。そして、ロランはこの行き詰りを、自分の生涯の一つの危機と感じていた様である。後年、この頃の事を「虚無な危機に遭遇した時、心のなかに永遠の命の火を再びともしてくれた……ベートーヴェン」、と回想しているからである。⁽⁴¹⁾

なお、附言すると、これより先17、8歳の頃（1883～4年）、ロランは「宗教的懷疑の危機」を経験する。「17歳と18歳とは、生涯の悲劇的な2年間だ。……この2年間は致命的な絶望の貧乏な怪物どもを内に隠していた。あの頃、ちょうどあの頃、私は虚無の底に触れたのだ。……精神の転身がおこっていた。それは苦しい強力な転身であった。⁽⁴²⁾」そして、もう一度、21歳の頃（1887年）に第二の「宗教的懷疑の危機」を経験した。『真ナルガ故ニワレ信ズ』を執筆したのはこの時である。後年、ロランは、「私が神を失って沈みつつあったあの青春の時期に、私の精力が行った第一の行為は、自分の宗教と手を切ることであった。これが私の最も宗教的な行為であった⁽⁴³⁾」と語る。

ロランはこうして、以後カトリックの教義を捨て、教会へ行ったり礼拝に列したりすることは止めたが、しかし、幼時から、信仰の篤い母によって養われた敬虔な宗教的心情は、死ぬまで失わなかった。マルヴィーダ宛の手紙で、ロランはそのことを告白している。「彼（ジレー）は、心底からカトリックですから、……私とは精神に非常な相違があります。しかし私は、あらゆる懷疑論よりも、……どんなものであれ、あらゆる信仰の方に自分がずっと近いのを感じます⁽⁴⁴⁾」と。

しかし、特にわれわれが注意すべきことだが、ロランは、『ジャン・クリストフ』の中で、クリストフの信仰について次の様に語るのである。「……じつをいえば、彼（クリストフ）はイエスに共感を抱いているといっても、ベートーヴェンに対しての方が、もっと多くの共感を抱いていた⁽⁴⁵⁾」と。

6

さて、ロランは第二序文の冒頭、当時の右述の様な自分の内外の「嵐」をつづめて、簡潔に「……破壊し更新する幾多の嵐に富む紆余曲折の一時期を私はくぐり抜けつつあった。」と述べ、それにすぐつづけて「私はパリから飛び出して10日のあいだベートーヴェンのもとに隠れ家を求めに行った⁽⁴⁶⁾」という。何

のための逃避行か。ロランは右の文章につづけて「私の子供の時以来、彼（ベートーヴェン）は、私の生活のための道づれであり、生の戦いの中で私は一度ならず彼によって支えられて来ていた。」⁽⁴⁷⁾「マインツでは、ヴァインガルトナーの指揮するベートーヴェン・シンフォニー諸曲の音楽祭をきいた」⁽⁴⁸⁾という。これらの文章を読むと、「逃避行」は一見、ベートーヴェンの音楽に自分の苦悩する魂の救済を求めての行動であるかにみえる。

しかし、前述の様なロランの魂の苦悩が、ただベートーヴェンの音楽によって、またそれに救いを求めての「逃避行」によって救済されうとは思われぬ。⁽⁴⁹⁾では、ロランにとって「10日間の行動」は何だったのか。

ロランが右の10日間の自分の足どりをかなり詳しく述べるところを見ると、「10日間の行動」は、その様な「逃避行」ではなくて、ロランにとって実は、何かもっと積極的な深い意味をもった行動であったに違いない。

ところが、ロランが記す「10日間の行動」は、それ自体としては脈絡のないばらばらの行動の集まりで、それだけでは、ロランにとって何等かの積極的な深い意味をもち得ると思われぬ。とすると、ロランは、パリから飛び出すに先立って、何か痛切な経験をしたに違いない。そして、「10日間の行動」は、その「痛切な経験」との関連においてはじめて積極的な深い意味をもち得るのであろう。

さて、前後の脈絡からみて、その「痛切な経験」こそ『ベートーヴェンの生涯』を書く原動力となったロランの「ベートーヴェン体験」に違いないが、ロランはその「経験」について、直接には何も述べていない。そこで、それが如何なる経験であるかを知るには、われわれは、その後「10日間の行動」についてロランが述べる所（彼の叙述）を手掛りにする他はない。

さて、ロランの「叙述」を手掛りにして「痛切な経験」が如何なる経験であるかを知る方法であるが、私は次に、「叙述」を実験台として、一種の実験を試みようと思う。即ち、予め、ロランがしたであろうと思われる「痛切な経験」の具体的な姿を——前述したロランの「内外の行き詰り」「苦悩」に照らして——、想定し、これを「仮説」として「ロランの叙述」に投入し、これに

よってその「叙述内容」が十分に説明されうるか否かをみよう。もし、説明され得たら、投入した「仮説」は真実となる。即ち、それが、当時のロランが実際にした「痛切な経験」なのである。

先ず「仮説」であるが——、ベートーヴェンという弱さも欠陥も悩みももった一人の生き身のひと、「苦しみ」を日ごとのパンとして食し、「運命」によって、その肉体を魂を、苦痛、病氣、不幸等々の鉄床の上で鍛えられ、しかも、それを生き抜き克服した一人のひとを、当時、内外ともに行き詰って苦悩していたロランは、その全心をもって感銘（共感）し、全人をあげて、そのひとに傾倒したのであろう。

彼のこの「傾倒」は、ベートーヴェンそのひとを自己のうちに受け容れ、これによって根底的に揺り動かされる底の痛切な経験であつたに違いない。ベートーヴェンそのひとが自己の存在そのもののうちへ入り込んでくるのである。晩年の手紙で、ロランは告白している。「……ベートーヴェンはつねに切実に私の存在に融け込み、私は彼を自己のうちに担っている……」⁽⁵⁰⁾と。

この様な経験を仮に「出逢い」と呼ぶなら、前述の様に、内外ともに行き詰って苦悩するロランの魂の救済は、ベートーヴェンとの「出逢い」によつてはじめて可能であつたのではないか。ロランが告白する「虚無な危機に遭遇した時、……心の中に永遠の命の火を再びともしてくれた」⁽⁵¹⁾救済者は、彼が「出逢った」ベートーヴェンであつたに違いない。

さて、この様なベートーヴェンとの出逢いのきっかけは何であつたか。ロラン自身の苦悩と「危機」感（前述）がその一つであることは確かだが、きっかけは、その他にもあつたかも知れない。しかし、何れにせよ、それはきっかけにすぎず、出逢い自体は突然におこる。少なくとも当事者ロランにとって、それは突然におこつた、殆ど信じがたい幸運な経験であつたに違いない。そうだとすると、ロランがこの時パリを離れたのは、突然おこつたベートーヴェンとの出逢いに動転し、それを信じられないロランが、自分自身にその幸運な「出逢い」を確認し、ある場合にはそれを反芻するためではなかつたか。

（右述は、われわれの仮説である。次にこれを、パリを離れた10日間のロラ

ンの足どりと行動についてのロラン自身の叙述に投入して、それが右の「仮説」によって説明されうるか否かをみなければならぬ。）

さて、ロランの「叙述」は二段に分かれる。第一段では次の様にいう。「私はパリから飛び出して、10日のあいだ、ベートーヴェンのもとに隠れ家を求めに行った。……私はボンのベートーヴェンの家を訪れて、そこで、亡き彼のおもかげに触れ、彼の親友らと相まみえた。コブレンツのヴェーゲラー家を訪れて、ベートーヴェンの親友だったヴェーゲラーの孫達に会い、……。」⁽⁵²⁾ 実際には、ロランはまたベートーヴェンの生家を訪ねた直後、ウィーンにベートーヴェンが死去した家も訪ねている。ベートーヴェンの生家や彼の親友、また親友の孫達にまで会ったのは、自らいう様に、亡きベートーヴェンそのひとのおもかげに触れるためであろう。ロランはここでは、ベートーヴェンの思想や作品等々に触れようとしているのではない。ベートーヴェンそのひとのおもかげに触れようとしているのである。触れて、そのひととの出逢いを確かめようとしているのである。ロランはつづいて、「マインツでは、ヴァインガルトナーの指揮するベートーヴェン・シンフォニー諸曲の音楽祭を聴いて」⁽⁵³⁾ いるが、これもここでは（右述した一連の行動の一環であるから）ベートーヴェンの家を訪れたのと同様、ベートーヴェンの作品をきいて、それをよすが（縁）にベートーヴェンそのひとのおもかげに触れ、彼との出逢いを確かめるためであろう。結局第一段の叙述はすべて「出逢い」を確認するためと解される。

第二段では、ロランは次の様に述べる。「雨しげき4月の灰いろの日々に、霧に包まれたラインの川岸で、ただベートーヴェンとだけ、心の中で語り合い、彼に自分の思いを告白し、彼の悲しみと彼の雄々しさと、彼の悩みと彼の歓喜とによって全く心を浸され、ひざまずいている心は、彼の強い手によって再び立ちあがらされた。」⁽⁵⁴⁾ これは、ロランがベートーヴェンそのひととの幸運な出逢い経験を、ラインの川岸で、いわば反芻しているのだ、と解することができる。

結局、パリを離れた「10日間の行動」に関するロランの叙述内容は、すべて、われわれの「仮説」によって説明することができる。してみると、前述した

「仮説」は今や真実となる。即ち、ロランが直接述べている訳ではないが、ロランはパリを飛び出す直前に、ベートーヴェンそのひとに深く感銘し、全人をあげて彼そのひとに傾倒するという「痛切な経験」(「出逢い」)をしていたのである。それによって、先述した彼の深い苦悩から「癒やされて再び立ち上がる」⁽⁵⁵⁾ことができたのである。

結局、前述したロランの「痛切な経験」は、ベートーヴェンそのひととの出逢いである。そして、それこそ、ロランが『ベートーヴェンの生涯』を書く原動力となったものに違いない。というのは、ロランは右の「叙述」につづけて、右の様な彼の「出逢い経験(それによる彼の魂の救済)」と『ベートーヴェンの生涯』との、他の「目的」や「狙い」の媒介によらない直接の関係を強調して、「これ(『ベートーヴェンの生涯』)は、傷ついている魂から生まれた一つの歌であった。これは、息の詰っていた魂が呼吸をとり戻し、再び身を起して、その『救済者』に捧げる『感謝の歌』である」⁽⁵⁶⁾というからである。われわれが先に、ロランが『ベートーヴェンの生涯』を書く原動力となっていた彼の「ベートーヴェン体験」は、内容的には、ベートーヴェンとの「出逢い経験」⁽⁵⁷⁾だったのである。

以上、われわれの探究によれば、ロランが『ベートーヴェンの生涯』を書く原動力となったのは、彼のベートーヴェンそのひととの出逢い経験である。しかも「出逢い」経験と『ベートーヴェンの生涯』とは直接に結ばれていた。とすると、ロランが『ベートーヴェンの生涯』の序文にあげた主たる希い(前述)は、何れももとは、その「出逢い経験」のうちに含まれていたものに違いない(5節参照)。ベートーヴェンとの「出逢い経験」こそは、「主たる希い」の母胎である。

とすると、先述の様に、ロランの変貌した「二つの希い」も、これを「出逢い経験」とのかかわりの中で、即ちその光の下で見直せば、変貌以前の元の姿をとり戻すに違いない。

してみると、いままで回り道を余儀なくされたが、——先述(5節)したわ

れわれの「主たる希いの元の姿とその真相」の究明の第二段階は、結局、「変貌した二つの希い」を、順次に右の「出逢い経験」の光の下で見直すことである。章を改めて、その仕事に取りかかろう。

——未完——

註

八

- (1) もっとも、この頃の伝記は、「伝記」がそこから抜け出したもとの地盤（例えば「頌徳文」）のなごりを、かたちの上にも、筆者の心情の上にもなお色こく残していることが予想される（後述参照）。
- (2) 前出、『古典古代における伝承と伝記』、136—137頁。
- (3) この種の文章を、当時の人々はただ、“bios（生涯）”と呼び、5世紀になってやっと“biographia”（伝記）と呼ぶ様になったという。（『古典古代における伝承と伝記』、3頁）
- (4) 同上、137頁。
- (5) 同上、137頁。
- (6) 本来ならば、「自己目的・自足的伝記」の実例の検討は、一つの実例についてするだけでは足りぬ。例外ということもありうるし、われわれ探究者が正体を見誤ることもありうるからである。そこで私は、別々の機会に二つの実例について検討した。（前出拙稿「伝記について」1、2、3、4、及び「伝記者のこころ」第二章参照。なお、前出拙稿「伝記作者クセノフォンの経験」参照）
しかし小論は、その全体が従来の私の論考の摘要をつくることを目的としているので、ここでは重複をさけて、ただ一つの実例の検討の次第と結果のみを示した。
- (7) 前出、ロマン・ロラン、『ベートーヴェンの生涯（Romain Rolland, Vie de Beethoven<Librairie Hachette, Paris>）』（片山敏彦訳、岩波文庫、13頁）。
- (8) 同上、13頁。
- (9) 同上、13頁。
- (10) 新村猛氏も、ロランの『ベートーヴェンの生涯』が、われわれが分類してきた諸種の伝記の何れとも異なった質の伝記であることを認めて、次の様にいう。「これ（『ベートーヴェンの生涯』）は……決して歴史家の著述ではないし、古代以来の頌徳伝でもなく、一頃盛行した小説化された伝記でもなく、或は、モーロワ風の伝記作品の類にも属しない。」（新村猛、『ロマン・ロラン』、岩波、56頁）
しかし、新村氏は、この伝記のその特異な性格の正体を深くは追究していない。
- (11) 私は先に、「文学的伝記」、「歴史的伝記」の検討（小論五章、六章）に際しては、伝記の基本的性格を解明するために、筆者がこの伝記を書いた「希い」の他に、主人公の生涯等に対する筆者の「解釈」、筆者がこの伝記を書いた「動機」等をも

考察した。しかしこの『ベートーヴェンの生涯』の場合は、序文にあげられた「主たる希い」の元の姿を考察するだけで十分である。というのは、特にこの場合は、後述する様に、他の種の伝記の場合と違って、それらの「希い」は、専ら筆者がこの伝を書いた原動力となった経験のみから直接に生れ出ている（その「経験」に含まれていた）と思われるから、それらの元の姿は、その原動力の性格、即ち伝の基本的性格をよく体现し端的にそれを示していると思われるからである（後述参照）。

- (12) 前出、『ベートーヴェンの生涯』、17頁。
- (13) 同上、12頁。
- (14) 同上、13—14頁。
- (15) 従来のロマン・ロラン研究は、右の「相違」や「くいちがい」を問題とせず、二つの序文があげる二つの希いを、そのまま並記している。例えば、新村猛氏は、ロランが『ベートーヴェンの生涯』を書いたのは、「時代、社会と苦悩を分ちあいながら、一人の個人としても、深い苦悩から脱却しようという動機をもって、その様な人物の肖像を描いたのであった。」（前出、新村猛、『ロマン・ロラン』、61頁）という。要するに、二つの序文があげた「希い」の「くいちがい」や「相違」が含む問題を意識していないのである。
- (16) ペギー『われわれの青春』（前出、新村、『ロマン・ロラン』所収、56頁）
- (17) 前出、『ベートーヴェンの生涯』、15頁。
- (18) 同上、15頁。
- (19) 同上、15頁。
- (20) 同上、16頁。
- (21) ロマン・ロラン、『ジャン・クリストフ（R. Rolland, Jean Christophe）』（新庄嘉章訳、新潮文庫、第1巻、12頁）
- (22) 同上、12頁。
- (23) 同上、12頁。
- (24) 同上、14頁。
- (25) 同上、14頁。
- (26) 同上、13頁。
- (27) これより先、1895年、パリではじめて教壇（ジャン・バチスト・セー学校）に立った頃、ロランは興隆してきた社会主義運動に強い関心を寄せ、「社会主義の啓示が私の中に入りこむにつれて、……大きな喜びが私の内に湧き起る。」と日記に記している。（前出、新村、『ロマン・ロラン』、90頁）
- (28) 1895年、ロランは母校高等師範学校で美術史を、1902年には社会高等研究院で音楽史を担当していた。そのためか、『ベートーヴェンの生涯』を音楽学のためか、音楽史のために書かれた書と誤解し、その見地からこれを批判する人があった様である。（前出、『ベートーヴェンの生涯』、12頁、14頁参照）
- (29) 先に注意したが、ロランが、後に書いた第二序文を第一序文の先に載せたのは、

ただ慣例に従ったというだけのことでなく、第二序文が先行するのが（序文の内容の重要さからみて）当然とする思いが、ロランの心中にあったためかも知れない。

- (30) 前出、『ベートーヴェンの生涯』、12—13頁。
 - (31) 同上、11—12頁。
 - (32) 同上、12頁。
 - (33) 同上、11頁。ここに「それは1902年であった」とあるのは、ロランの思い違いであろう。
 - (34) 1902年2月21日付、ジレー宛の手紙。
 - (35) 1901年3月1日付、ジレー宛の手紙。
 - (36) 前出、新村、『ロマン・ロラン』、116頁参照。
 - (37) 同上、193頁。
 - (38) 前出、『ジャン・クリストフ』、第1巻、11頁。
 - (39) 前出、新村、『ロマン・ロラン』、51頁参照。
 - (40) 前出、『ジャン・クリストフ』、第2巻、「反抗」参照。
 - (41) ロマン・ロラン、『幼時の思い出』（新村、『ロマン・ロラン』所収、55—56頁）
 - (42) 片山敏彦、『ロマン・ロラン』、みすず書房、10頁。
 - (43) 前出、新村、『ロマン・ロラン』、156頁。
 - (44) 1898年11月7日付、マルヴィエール宛の手紙。なお、1943年11月12日付の手紙（遺書）で、ロランは次の様にいう。「私はクラムシーの両親の傍に葬られることを望みます。私は教会の儀式を信じないとはいえ、自分の身体が聖マルタン聖堂に運ばれ、そこで追悼の祈りが行われることに同意します。」
 - (45) 前出、『ジャン・クリストフ』、第1巻、360頁。
 - (46) 前出、『ベートーヴェンの生涯』、11頁。
 - (47) 同上、11頁。
 - (48) 同上、11頁。
 - (49) この様にいっても、1901年のロランの経験（ベートーヴェン体験）が、彼のベートーヴェンの音楽への心酔と無関係である、というのではない。ただこの時、ロランは音楽への心酔をつき抜けて、ベートーヴェンそのひとへの傾倒に至ったのである。註(47)のロランの文章は、そのことを示唆するために挿入されたものと解される。（後註<57>参照）
- なお、念のためここでロランとベートーヴェンの音楽とのかかわりの主なものを、資料によって年代順に辿ってみよう。
- ロランは、生地クラムシーでの幼年期には、母親の影響で音楽（ドイツの音楽）に親しんでその影響をうけた。「……私の心が疲れ、精神が干からびた時、私はピアノの傍にあり音楽に沐浴した。そして魂が新鮮に澄み再び望みが花開き私は若返ってそこから出て来るのであった。」（『幼時の思い出』）

パリに出て、ルイ・ル・グラン中学校に入り、更に高等師範学校へ入学してから
は、アンドレ・シュアレスやクロード等と共にベートーヴェンの音楽に心酔し
た。「アンドレ・シュアレスは私の一番古い友人だ。クロードもいた。学校でベ
ートーヴェンのミサ・ソレムニスの初めての演奏を企てたのはシュアレス、クロ
ードと私の三人であった。」（「片山氏との会話」前出、片山、『ロマン・ロラン』
所収、260頁）

高等師範学校卒業後もロランは終生ベートーヴェンの音楽に親しんだ。ローマ留
学（1889～91年）の際、マルヴィーダ・フォン・マイゼンブークとの深い交際
も、ベートーヴェンの音楽を通じてであった。（ロランは、ベートーヴェンのピア
ノ奏鳴曲106番のアダージョを、「マルヴィーダのアダージョ」と呼んだ）そして、
そこでマルヴィーダと心を融けあわせたことが、彼の以後の生涯に大きな影響を与
えた。（ロランは、彼女を「第二の母」と呼び、1903年4月、彼女がローマで息を
ひきとる前夜、ロランはこの「別れのアダージョ」をモンパルナスの家で弾いたと
いう。）ロランの晩年の大著『ベートーヴェン研究』はロランのこのような永年にわた
るベートーヴェンの音楽への心酔の成果である。（後註<57>参照）

- (50) 1929年7月、片山敏彦氏宛の手紙。
- (51) 前註(4)参照。
- (52) 前出、『ベートーヴェンの生涯』、11頁。
- (53) 同上、11頁。
- (54) 同上、11頁。
- (55) 同上、12頁。従来のロマン・ロラン研究は、ロランの「10日間の行動」を問題と
せず、それにこの様な特別の意味を認めてはいない。例えば、新村猛氏は、ロラン
の「10日間の行動」を、ただ、『ベートーヴェンの生涯』を書く心の準備のための
行動であるかに解する。（前出、新村、『ロマン・ロラン』、55—56頁参照）
- (56) 前出、『ベートーヴェンの生涯』、12頁。
- (57) ここにいうロランの「ベートーヴェン体験（出逢い）」の性格を注意せねばなら
ぬ。

普通、ロランの「ベートーヴェン体験」といえば、ベートーヴェンの音楽へのロ
ランの心酔と、それによってロランがうけた影響を指す。ところが、ここに述べた
「ベートーヴェン体験」は、それとは性格が異なる。

さて、ロランは自ら『ベートーヴェンの生涯』と、彼のもう一つの大著『ベート
ーヴェン研究』（1928年その「第一部<「エロイカよりアパシヨナータまで」>刊）
とが性格の違うものであることを注意している（前出、『ベートーヴェンの生涯』、
12頁、14頁及び同頁の原註参照）。しかし、両者が何れも広義におけるロランの
「ベートーヴェン体験」から生れ出たものであることは疑いない。とすると、ロラ
ン自身がなした右の区別は、ロランの「ベートーヴェン体験」が一樣のものではな
いことを示唆している。

ロランは、生地クラムシーでの幼年期以来ベートーヴェンの音楽に親しみ、青少年期にはそれに心酔し、以後も終生それに打ち込んで深く感銘し、そこから多大の影響をうけた。後年の彼の「思い出」、手紙等がそのことを証している(註<49>参照)。ロランの『ベートーヴェン研究』は、彼のこの様な、永年にわたるベートーヴェンの音楽への心酔の成果に他ならぬ。(『ベートーヴェン研究』は、1930年にその第Ⅱ部が、37年に第Ⅲ部が、43年に第Ⅳ、第Ⅴ部が刊行されている。)

しかし、ベートーヴェンの音楽に心酔し、音楽作品を通じて影響をうけるのと、——その影響が如何に大きく深刻であっても——ベートーヴェンそのひとに出逢い、全人をあげて彼そのひとに傾倒するのは、別のことである。

ロラン自身にとっても、ベートーヴェンそのひととの出逢いは、それまでの彼のベートーヴェン体験とは別種の経験であったに違いない。また、それは今回(1901年)がはじめての経験であったに違いない。ロランはこの時はじめて、ベートーヴェンの音楽への心酔をつきぬけて、ベートーヴェンそのひとへの傾倒に至ったのである。1901年はちょうど、その「心酔」から「傾倒」への転機だったのである。ロランが右の出逢い経験に基づいて書いた『ベートーヴェンの生涯』の第二序文で、わざわざ、『ベートーヴェン研究』と『ベートーヴェンの生涯』との性格の違いを改めて確言した(前述)のは、一つには、ロラン自身がそれらのこと(右述した「別種」と「はじめて」)をこの時反省し、自覚したからであろう。

結局、前述した『ベートーヴェンの生涯』を書く原動力となったロランの「ベートーヴェン体験」は、『ベートーヴェン研究』のもととなった彼の「ベートーヴェン体験」とは性格が違う。内容的にいうと、それは、ベートーヴェンそのひとへの全人をあげての傾倒であって、ベートーヴェンの音楽への心酔にはつきない。ロランは今や、それをつき抜けて、ベートーヴェンそのひとへの傾倒に至ったのである。

従来のロマン・ロラン研究は、ロラン自身が確言しているに拘わらず、『ベートーヴェンの生涯』と『ベートーヴェン研究』とが別種の書であることを認めず、一連のものと解し、従ってロランの「ベートーヴェン体験」に、「ベートーヴェンの音楽への心酔」と「ベートーヴェンそのひとへの傾倒」との二種があることも、また従って、「心酔」から「ひとへの傾倒」への転機が存在することも認めない。しかし、高等師範の学生時代以来のロランの親友アンドレ・ジュアレスは、自分自身の場合と対比して、自分の場合は、ベートーヴェンの音楽への心酔は、高等師範学校卒業後すぐ醒めたのに、ロランの場合は反対に、深まって終にベートーヴェンそのひとへの傾倒(信仰)に至ったことを認めて、次の様にいう。「福音書を書く様な態度でベートーヴェンについて書く権利を、私はロマン・ロランにだけ認容する。なぜなら、彼は実際その精神で生きているのだから」と。(前出、片山、『ロマン・ロラン』、184—185頁。なお、新村、『ロマン・ロラン』、183—184頁参照。)